

# 浪江の こころ通信

● 第107号 ●



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第107号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592  
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2  
「浪江のこころ通信」宛て  
FAX 0240(34)4593

## 浪江町ゆかりの人

### 思いをはせる浪江のこころ

未曾有の大災害により甚大な被害を受けたふるさと浪江町。

震災前にふるさとを離れた人、町と関わりがある人が抱く浪江町への思い、復興を支えるために果たしたい思いなど「浪江町ゆかりの人」の声をお届けします。





群馬県



## 今野 義雄さん(津島出身・群馬県在住)

取材者：高崎子ども劇場 大澤・関根  
取材日：1月22日

### 帰ると「ほっ、とさせてくれる空気、津島はかけがえのない故郷！」

今野さんは、津島小・津島中学校を経て小高工業高校を卒業後、東京都で就職。国立病院への転職を機に群馬県での生活を開始。過疎地の医療確保や医師不足問題に取り組む中で、「医療法人大戸診療所」の設立・運営に携わり、平成25年には地域医療に貢献した人に贈られる「若月賞」を受賞しました。

73歳となった現在も戸診療所の顧問として過疎地の医療を見守る一方で、居住地である群馬県渋川市の「北毛保健生活協同組合」の理事として地域医療の充実に向けた取り組みを進めています。

◀浪江から離れて暮らしていても、多方面から浪江町のサポートを続ける今野さん



#### ◆震災前後

故郷の津島には母が一人で暮らしていました。盆や暮れはもとより、事あるごとに帰省し、近所の人たちや親戚・同級生と会いだんらんするのが楽しみでした。震災直後、南会津町に避難した母のもとに駆けつけましたが、避難の長期化や高齢となってきた母の健康が心配で群馬県に来てもらいました。母はその後、娘のいる千葉県に避難し、昨年3月に93歳の天寿を全うしました。生きているうちに故郷に帰れなかったのが悔やまれます。

#### ◆現在の活動

群馬県東吾妻町に避難してきた南相馬市や浪江町の人たちの医療支援や交流を始め、現地視察や福島県の仮設住宅や復興住宅での健康相談・お茶会などを行ってきました。とにかく、「被災地浪江」の現状を知ってもらうことが必要と、この8年、医療関係団体・自治会などの皆さんをこれまでに延べ800人余り、浪江町などに案内してきました。

帰還困難地域で9年も放置されたままの実家は、人が住める状況ではなく、母も亡くなったことから解体することになりましたが、先祖からの墓も故郷も守り続けたいと思っています。

“津島の獅子舞”や“田植え踊り”を懐かしく思いますし、いつも変わらぬ山や川、なによりも空気が違います。帰ると「ほっ、とするのが故郷です。震災前の津島には、「診療所を守る会」があり医師確保など、努力していましたが、この“津島の思い”が群馬県の過疎地で医療確保に携わってきた私の原点であったと思います。

#### ◆これからの浪江町

津島の有志「ふるさと津島を映像で残す会」のドローン映像の完成が楽しみです。無くなってしまうかも知れない故郷の姿・実家の姿を、孫や次世代に伝えたいものです。

“帰還解除”されても戻る人が少ないのは残念ですが、迷っている町民が帰る判断のできる環境・子供たちが安心して帰れる状況を早く作って欲しいものです。町職員の皆さんも本当によくやっています。

神奈川県



## 鎌田 正彦さん(幾世橋出身・神奈川県在住)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：2月17日

### 「見てもらえない、ほっとけない、みんなが幸せな社会になったらいいね。」

小学校6年生まで、幾世橋小学校に在学。その後、ご家族の仕事の都合で神奈川県相模原市に転居された鎌田さん。相模原市の小学校の同窓会会長や「NPO法人神奈川県被害者支援センター」のメンバーとして活躍されています。



▲良き理解者である奥さん(千代子さん)と

#### ◆浪江町とのつながり

友達と幾世橋の川でドジョウやカジカ捕りをしたり、校庭の藤づるで“ターザンごっこ”をして遊んだりしたこと、給食のけんちん汁がおいしかったことなど、思い出がたくさんあります。自然が豊かでしたね。亡くなった父は、銀行員や“炭鉱マン”と職を転々としていました。幾世橋で魚屋を営んでいたこともあり、4男1女の子育てで忙しいなか、母も一生懸命に手伝っていた姿が浮かびます。

私が小学校6年生のとき、叔父夫婦の世話で、家族そろって相模原市に転居しました。地元の小・中学校、神奈川県藤沢市の高校を経て、東京都内の大学を卒業、就職と、関東圏での暮らしが長くなりましたが、幾世橋小学校の同窓生とのつながりは現在も続いています。平成15年に浪江町「福島いこいの村なみえ」で開催された幾世橋中学校の同窓会に参加。翌々年、横浜で開催された同窓会には、20人ほどの人たちが集まりました。東日本大震災後、連絡が取れない人も多く、どこで暮らしておられるだろうか、元気だろうか、と気になります。

#### ◆世界平和への思い

犯罪被害にあった人たちの中には、声を出さなくて諦めてしまう人たちも少なくありません。私は、困っている人を“ほっとけない”性分で、そうした人たちの支援活動や防犯のための活動を続けてきました。また、国際交流協会の支援員として、イタリア、カナダ、ベトナムといった様々な国の在日外国人の人たちとの交流も進めています。

様々な活動を通して、「世界平和を願い、弱者市民の声を市政に！」届けたいという思いが募り、4年前の県議会議員選挙、昨年の市議会議員選挙の二つに立候補しました。残念ながら当選はできなかったのですが、思いは変わりません。弱者の声を政治に届けるために、活動を続けていきたいと思っています。

#### ◆浪江町への思い

“ふるさと福島”への思いは熱く、数年前まで相模原市の福島県人会の会長も務めていました。現在は、「かながわ避難者と共にあゆむ会」のメンバーとして、福島県から神奈川県に避難して暮らす人たちの支援活動を行っています。福島第一原子力発電所の廃炉の問題など、難題が残る“ふるさと浪江町”、被災した人たちへの国からの支援がもっとあればと思います。私は陰ながら応援し続けたいと思っています。そして、浪江町の人たちと会って励まし合うことができると願っています。



鹿児島県

## 諏訪園厚子さん (川添出身・鹿児島県在住)

取材者：NPO法人つなぎておおむた 彌永  
取材日：1月21日

### 昔の浪江町に戻ってほしい。心の底から、そう思っています。

結婚を機に鹿児島へ移られた諏訪園さん。震災直後、「うつくしま福島の会(福島県人会・鹿児島県)」を立ち上げられました。発足当時から書き続けておられる何冊もの記録ノートには、打合せメモや活動が掲載された新聞の切り抜きなどがびっしり。故郷への温かい思いがあふれています。



▲「福島復興支援ツアー」取材記事が掲載された新聞を手にほほ笑む諏訪園さん

震災直後、年齢も生活の状況も全く違っていたけれど、「故郷福島」のために何かできることを」との共通の思いを持つ3人が出会った。県人会を立ち上げました。「まずは、鹿児島県に在る福島県出身者へ呼び掛けてみよう」と、記者会見を開き、私が年長者なので会長を引き受け、事務局も私の職場にした。会見翌日から職場の電話が「ジャンジャン鳴って、若い職員が「何を言っておられるのか。」「鹿児島は」「福島の」「だ」「け、分かります」と私のもとへ。九州の人には聞き取りづらい、懐かしい私の故郷の言葉で、受話器の向こうから切々と意見を伝えてくださいました。こうした鹿児島県在住の福島県出身の皆さんと、翌月に「第1回昼食懇談会」を開きました。懇談会は今も6月と11月に開催していますよ。春には「福島復興支援ツアー」を行っています。「私、ここで生まれたのよ」と、浪江駅前に残っていた西病院の前で皆さんにお話したこともあり。今回は8回目ですが、鹿児島県の人たちには「今だからこそ、福島県を見てほしい」と思っています。「報道だけではわからない。参加して良かった」との感想が、活動継続の励みです。震災の年の秋、「浜通りに行く運転手がないから、荷物は福島駅止め」と言われ、県人会発起人の3人で、南相馬市まで鹿児島県人のサツマイモや新米を運びました。決壊した堤防、バリケードでふさがれた道：自分の目で見たあの景色は忘れません。故郷にはいつでも帰れると思っていたから遠くに行けたし、遠くに居られたんです。昔のように帰れない場所になったことが、悲しく切ない。それでも、スーパーや歯科医院ができ、十日市祭も町内で開催される、この少しずつの「動き出し」をうれしく思っています。